特集　ポーラ美術館コレクション展

美の人類遺産、佐賀へ――

ポーラ美術館コレクションの魅力

佐賀新聞社社長　中尾清一郎

佐賀新聞社の主催事業を「自画自賛」したくはありませんが、今回、ポーラ美術館の所蔵する名品の数々を佐賀でご覧いただくことができるのは画期的なことです。今回の展示は「今までも印象派の展覧会は見た」「有名作家は数点で、あとはなじみのない無名の作品では」という疑念を一掃するレベルです。ぜひ時代背景や作家、作品の特徴を知ることでより深い感動を味わってみてください。

佐賀での印象派作品展

佐賀で初の本格的な西洋絵画、印象派の展覧会は1974年、東京の西洋美術館所蔵「松方コレクション展」であった。初めて見るモネやルノワールの色彩の美しさはモノクロやくすんだカラー図版でしか知らなかった印象派絵画の素晴らしさを多くの人に知らしめた。その後もテーマを絞ったり、フランスの一地方美術館の地味な所蔵作品が展観されることがあったが、それらは印象派や、まして西洋美術史上の名作というレベルには遠く及ばなかったのも事実である。今回のポーラ美術館コレクションは、よくもこれだけの良質な作品がまとまっていると驚かざるを得ない、ヨーロッパや現地フランスでもめったに存在しない秀逸な作品群である。このコレクション形成にあたって、現地画商の眼力、作家との結びつきの強さ、何よりコレクターの熱意に頭が下がる思いである。

クロード・モネ
睡蓮
1907年｜油彩／カンヴァス｜93.3×89.2 cm
右下に署名、年記：Claude Monet 1907

ピエール・オーギュスト・ルノワール
アネモネ
1883-1890年頃｜油彩／カンヴァス｜46.2×38.1 cm
右下に署名：Renoir.

印象派を生んだフランスの近代

印象派そのものの解説は他に譲るが、19世紀後半、なぜフランスに印象派が花開き、今日に至るまでフランスが「文化大国」と言われるのかは考察に値する。中世以降、百年戦争で最終的に勝利したフランスは急速に中央集権化し、島国のイギリス、寒冷地で分裂にあえぐドイツ（神聖ローマ帝国）の国々を尻目に広大な国土、豊かな生産力と人口を基礎としてヨーロッパの大国の地位を確立した。ルイ14世に代表されるフランス絶対王政は各王朝の模範となり、ヴェルサイユ宮殿やフランス語、料理は各国宮廷のプロトコール（国際儀礼）となった。フランス革命は個人主義や人権の大切さを民衆に浸透させ、愛国心に満ちたフランス軍はナポレオンの下、ヨーロッパを席巻した。19世紀後半のフランスはナポレオン3世の没落後、軍事面では後退したが、むしろ国力を金融経済や文化政策に注ぎ、豊かになった市民層はかつての王侯貴族に代わって絵画や音楽、建築のパトロンとなっていく。巨大な宮殿の壁面を飾る王や皇帝の歴史画、宗教画よりも、ブルジョワの邸宅には美しい自然や幸せな家族肖像画が好まれるのは自明のことである。印象派は当初、それまでの堅苦しいアカデミズムに対抗する美意識として現れ、しばらくは評価を得なかった。印象派を好んだのはむしろ新興国アメリカや急速に欧米化していった日本のブルジョワ、コレクターであったのは興味深い。

作品を観るにあたって

印象派の作品を鑑賞するとき、その絵の「大きさ（サイズ）」「色彩の美しさ」に注目してほしい。作品がどのような経緯で描かれ、どんな場所に掛けられたかは想像するだけでも楽しい。また、言うまでもなく、当時の人々は写真が一般的でなく、次にカラー写真や映画などの「動画」を見たことはなかった、という事実を念頭に置いてみてはどうだろう。世界の隅々で起きているリアルタイムの動画を簡単に見ることができる現代人とは視点が違うはずだ。

印象派からフォーヴィズムへ

写真の発明と普及によって画家の活動領域は変化していく。事物や人間の表情を正確に写し取るならば写真に勝るものはなく、絵画の「写実性」の意味を、画家たちは問い直すようになる。絵画にしかできない表現を追求する中で生まれたのが、現実には存在できない形や色をまとったゴッホやセザンヌのポスト印象派の作品である。それらはヴラマンクやマティスに受け継がれていく。

造形の冒険 ピカソとブラック

ピカソやブラックの作品がなぜ傑作とされるのか。戯画のような表現、うまいのか下手なのかわからない、と素直に感じるのも展覧会の楽しみである。今回のポーラ美術館コレクション展はモネ7点、ルノワール6点、セザンヌ、マティス、ブラック各4点、そしてピカソは6点に及びそれにマネ、ゴーガン、ゴッホ、ムンクやデュフィといった作家まで加わるのだから壮観というほかない。

佐賀新聞創刊130周年記念「ポーラ美術館コレクション モネ、ルノワールからピカソまで」

2014 4/22（火）～ 6/22（日）
※休館日　毎週月曜
（4月28日、5月5日は開館）、5月7日

会場／佐賀県立美術館（佐賀市城内 1-15-23 ）
料金／一般・大学生：1200円（1000円）　高校生以下：無料　※（）内は前売り料金
主催：佐賀新聞社、ＲＫＢ毎日放送、佐賀県立美術館、公益財団法人ポーラ美術振興財団
ポーラ美術館 http: //www.saga-s.co.jp/pola.html
後援：在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本、佐賀県教育委員会、佐賀県内 20 市町教育委員会、九州旅客鉄道、西日本鉄道、九州朝日放送、テレビ西日本、ＴＶＱ九州放送

超目玉 おすすめ作品紹介!!

ピエール・オーギュスト・ルノワール
レースの帽子の少女
1891 年｜油彩／カンヴァス｜ 55.1 × 46.0 cm
左下に署名：Renoir.

ルノワール

1841 年リモージュで仕立屋の父とお針子の母を両親に生まれたルノワールは、わずか 13 歳で陶器の絵付け工として働きはじめるが、画家を志してシャルル・グレールのアトリエに入り、モネ、シスレーらと出会う。1870 年代には都会の風俗を明るい色彩で描き、印象派展やサロン（官展）に参加した。彼は、他の印象派の作家たちと違い、サロンや大衆に若くして認められため、印象派から離れていった。1880 年代後半にはイタリアに旅行するなど、一時期、明確な輪郭線と立体描写による古典主義的な表現に向かうが、その後明るい色彩とやわらかに溶け合うような筆致で女性の肖像画、裸婦像などを数多く描いた「真珠色の時代」を経て、赤が響き渡る、織物のような豪奢な晩年の作風に行きつく。

見どころ

ポスターやチケットにも使われている今回の展覧会の目玉ともいえる作品です。なによりルノワールの描く女性像、特に裸婦と少女に向ける温かいまなざし。そして対象を美しく描こうという意思が本当によく現れている作品です。少女の若々しさ、髪や上質なレースの表現など、このモデルが幸せな家に生まれて、幸せな生活を送っているというのが、こちらに伝わってくる、見るものに喜びを与える作品です。

クロード・モネ
ジヴェルニーの積みわら
1884 年｜油彩／カンヴァス｜ 66.1 × 81.3 cm
右下に署名、年記：84 Claude Monet

モネ

1840 年パリで生まれたモネは、幼年期から青年時代まで港町ル・アーヴルで過ごし、画家ブーダンと出会って、戸外で直接自然を描くことを学んだ。1859 年にパリに出て、グレールのアトリエに入り、シスレーやルノワールらと出会った。1865 年サロンでの入選を果たす一方、カフェ・ゲルボワでマネたちと交流する。1869 年にルノワールと訪れたラ・グルヌイエールでの制作から印象派風の絵を描き始め、1874 年の第 1 回印象派展に出品した、《印象　日の出》（1873 年、マルモッタン・モネ美術館蔵）が「印象派」の名の起こりとなった。水面の揺らめきや、自然が移りゆく瞬間をとらえるため、彼は色彩を断片に分割した筆致を用い始めた。40 歳代からジヴェルニーに定住し、86 歳で亡くなるまで邸内の庭の池に浮かぶ睡蓮を描き続けた。

見どころ

信じられないことかもしれませんが、印象派の時代までの画家は外で絵を描く、あるいは外で作品を仕上げるということはほとんどありませんでした。自然の光の中でスケッチしたり、時間の変化で同じものの表情が刻々と変化していくということに関心を持つ習慣はなかったのです。その点、モネは当時、発明されたチューブ入り絵の具などを上手に使って、外でのスケッチや色彩の変化を使い分ける作品をたくさん残しています。その中の一つがこの「ジヴェルニーの積みわら」。つまらない、どこにでもある積み藁の色の変化を実に多様に描きわけています。印象派の醍醐味を実感させる作品です。

ラウル・デュフィ
五重奏
1948年頃｜油彩／カンヴァス｜33.2 × 41.4 cm
中央下に署名：Raoul Dufy

デュフィ

デュフィは1877年ル・アーヴルに生まれる。1900年にパリに出て国立美術学校で学ぶ。1905年頃にマティスのフォーヴィスムの影響を受け、それ以後、明るい色彩を用いはじめる。1912年頃には一時、セザンヌの影響を受けるものの、音楽的なリズムを感じさせる軽やかな線描と奔放な色彩による画風で描き続けた。1937年のパリ万国博覧会の際には電気館に大壁画を制作した。その他、装飾芸術も手がけている。

見どころ

デュフィの名はあまり知られていませんが、何か描き殴ったような、ポスターのようなどこかポップで明るい楽しげな雰囲気を持つ画家です。室内でのオーケストラや室内楽、楽器の演奏を題材にした作品を多く残しました。今回の作品も「五重奏」と命名されていて、画家の音楽好きが現れています。当時の印象派あるいはデュフィなどのパトロンたちは、自分たちの家庭の中で行われている社交や小さな音楽会などを題材にするのを好んだということが伝わって来ます。

ポール・セザンヌ
砂糖壺、梨とテーブルクロス
1893-1894年｜油彩／カンヴァス｜50.9 × 62.0 cm

セザンヌ

セザンヌは、1839年に南仏エクス＝アン＝プロヴァンスの裕福な銀行家の家に生まれた。ブルボン中学校ではのちに作家となるエミール・ゾラと親交を深める。最初は法律を学んだが1863年にパリに行き、アカデミー・シュイスでピサロ、ルノワール、モネ、シスレーらと出会う。1860年代末にカフェ・ゲルボワでのちに印象派の仲間となる画家たちと知り合い、とくにマネの影響を強く受けた。1872年以後はピサロの影響により印象派の技法で作品を制作し、印象派展にも参加した。しかし彼はしだいにその影響から離れ、自己の感覚をもとに自然の本質を明るい色彩と堅固な形態によって構築的に描き出す独自の画風を確立した。晩年になってはじめて評価の高まったセザンヌだが、歿後の1907年、サロン・ドートンヌで回顧展が開催され、ピカソ、ブラック、レジェ、マティスといった後世代の芸術家に多大なる影響を与えた。

見どころ

セザンヌの時代になると徐々に対象物は形を失っていきます。輪郭線を持たない作品がたくさん出て来て、セザンヌの晩年に至っては、何を描いたのか近くでは分からないほど、形象を失っていきます。セザンヌが、その後にくるフォーヴィスム、あるいはピカソの出現を知っていたとは思えませんが、明らかにそれを予見させる作品を描いています。セザンヌは、日常のさりげない静物、例えば、テーブルの上のコーヒーカップや果物などを描きました。そこに見られる非常に温かなまなざし、質素な生活を感じさせる視点は当時の人々にも新鮮に映ったことでしょう。